

## 空襲を通じて歴史の「断絶」と「連続」を学ぶ

東京女子大学 准教授

柳原 伸洋

### はじめに

第二次世界大戦中の空襲によって、日本とドイツだけでも 80～90 万人以上、他の国々・地域の被害を合わせれば 100 万人を超える人びとが犠牲となった。その多くは子ども、女性、高齢者といった民間人である。そして空爆は、2018 年の現在もなお、生活基盤としての住居や環境を破壊し、そして人を殺害している攻撃手段であり、空襲の犠牲者は日に日にその数を増やしている。つまり、空爆は過去から現在まで連続している事象なのだ。

「歴史総合」の科目概要のひとつには、「世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する科目」と記されている。日本やドイツでも、空襲が 20 世紀後半の社会、そして現代に与えた影響ははかりしれない。たとえば、都市構造そのものを変えていたり、高校生の祖父・祖母（もはや曾祖父・曾祖母だろう）が空襲体験者である確率が高かったりする点から、この指針と適合しているように思われる。「身近な地域の歴史」学習などの一環として都市・地域の空襲をとりあげている学校もあるだろう。

だが、歴史教科書では空襲の扱いは「短文」で完結してしまう（他の事項も同様だが）。歴史事象を相互に複眼的に考えるためには、各項目のつながりを押さえることは必須であろう。そこでこの小文では、「断絶」と「連続」というキーワードを用いて空襲と歴史について考えてみたい。

### ■個人・社会のトラウマとしての空襲

各地の戦災資料館・歴史博物館などで体験者の証言集を閲覧すれば、証言収集が大規模に展開していくのは 1970 年頃だということに気づく。その後、「〇〇学校同窓会」などが戦後 50 年、60 年以上を経てから戦争体験集を編むようになる。当然ながら、空襲は体験者にとって耐えがたいトラウマだ。死線をさまよった体験や身近な人の死は、他人に語ることが難しかった。

空襲を学ぶうえで、まずはこの「不可知」の領域について認識する必要がある。むしろ、「なぜ語りにくいのか」を考える学びも可能かもしれない。ブリーモ・レーヴィがアウシュヴィッツで生き残れたことに「罪」を感じたように、恐怖と同時に多くの後悔や死者への後ろめたさを想像することから空襲の学びははじまる。

このように、空襲に関する語りは一度の断絶（空白）を経て発せられていることを忘れてはならない。これは、ドイツをはじめ世界各地の体験証言でも同様である。

### ■「遠い」空襲の性質

現代日本で、空襲は多くの人びとにとって「遠い」存在だ。これは空爆という戦術の本質そのものであり、空襲を考えるうえでの困難さのひとつである。つまり、遙か上空からの爆撃は加害と被害との距離を増大させ、両者の関係をかぎりなく遠ざけた。ゆえに、加害側は被害者の顔を見ることはほとんどなく、誰を殺したのかさえも認知す

ることはほぼ不可能だ。ここに、日本において空襲被害が天災かのように語られる要因や、日本の実行した中国爆撃が歴史的に文脈化されにくい原因がある。

この「距離の問題」は、相手への無関心さともつながる。つまり、加害と被害の距離が拡大していけば、「クリーン」で自らは痛まない戦争が遂行できる。しかし、ここには他者の死への無関心という「差別」が含まれている。これに関し、荒井信一が空爆の思想と植民地主義との関係について重要な指摘を行なっているので参照されたい。そして、空爆は20世紀に顕著となった「総力戦」や「非対称な戦争」の主因であり、現在の「対テロ戦争」の支柱のひとつとなっている。

原子爆弾が国際的な規制の動きを生み出したのは「誰もが被害者になりうる」という当事者性が機能したからだともいえるが、空爆についてはそうではない。「通常兵器 conventional weapon」という言葉で、原子爆弾や化学兵器との差異が強調され、用いられ続けている。また、国際情勢が「力の政治」を重視しはじめている昨今、その「最前線」には常に空爆があることは意識しておきたい。

## ■歴史的な文脈（コンテキスト）を捉える大切さ

空襲の語りは、犠牲の語りが中心的だ。ただ、この語りは一人歩きしやすく、誰からも否定しづらい「犠牲者神話」を創りだしてしまう。また、日本空襲は、アメリカ軍の非道さに対する非難とのセットでしばしば語られる。だが、完全な「無実・無垢」の状態に爆弾が降ってきたわけではない。つまり、日本の場合には、植民獲得競争への参加や、重慶爆撃を含める空爆が前提にあった。ドイツの場合では、ワルシャワやロッテルダム、そしてイギリスへの空爆が、ドイツの受けた空襲の前史としてあったことは想起されるべきだろう。また、撃墜やリンチによる爆撃機搭乗員の死も忘れてはいけない。たとえば、イギリス王立空軍だけで第二次世界大戦中に5万5000人が死亡している。

空襲を語るうえでの歴史的な文脈の大切さは、2003年にドイツ・イギリスで巻き起こった「空襲論争」で指摘された。つまり、「犠牲の国民としてのドイツ」という語りを脱文脈化して話すことが、ナチ・ドイツの所業を相対化し、あるいは相殺してしまうのではないかという議論である。実際に、ドレスデン市やプフォルツハイム市などの空襲・戦災で知られるドイツ都市では、空襲の周年追悼の際にネオナチをはじめとする極右が「空爆は連合軍によるホロコーストだ」というスローガンを掲げて行進する事態が生じている。

歴史学の成果が総じて白黒など付けられないように、空襲を考えることは「灰色」を思考することだ。「歴史総合」は、「世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて…」の箇所に加えて、「……資料を用いながら、歴史の学び方（「類似・差異」、「因果関係」に着目する等）を習得する科目」とも定められている。しかし、教科書記述が、比較的、「確固とした歴史事実」に基づいていることから、両者の懸隔（断絶）をどのように埋めるかが課題となるだろう。

## ■「断絶」を埋める日常の視点：『この世界の片隅に』を例に

このような「断絶」を特徴とする空襲の歴史は、どのように高校生の学びに「接続」できるのだろうか。ここでは、アニメやマンガなどのポップカルチャー作品も一定の役割を果たすだろう。では、空襲が描かれた作品について考えてみよう。

昭和50年代生まれの私の世代には、「悲惨さ」を劇的に表象した『はだしのゲン』などのマンガが与えたインパクトが強かった。「空襲」といえばアニメ映画『火垂るの墓』（高畑勲監督、1988年）だろうか。同作は、原作者の野坂昭如から「アニメ恐るべし」との発言が出たほどにインパクトのある映画だった。とくに物語序盤の空襲シーンは、緻密に、かつ「リアル」に描かれていた。ほかにも、「防空頭巾、子ども、貧困」は、後の空襲関連の映画でも繰り返されるモチーフとなった。これらの作品は、「日常としての平和」

と「非日常としての戦争」が、対立項として描かれる傾向が強かった。ゆえに「悲惨さ」が強調されていたのである。

しかし、戦争を扱った作品と特定の世代との関係もまた、年々変化している。先述のように空襲体験はトラウマ体験だったので、これを若者など非体験者が知ること自体にも「心の痛み」をとまなう。ごく私的な範囲だが、戦争の歴史について大学生に講義していると、「幼いころから戦争の悲惨なシーンは避けてきました」という学生がちらほらいる。また、2018年の夏に放送された第二次世界大戦を扱ったドキュメンタリーには、「この番組では死体などの描写が出てきます」といったただし書きが番組開始時に挿まれていた。もちろんやむを得ない事情もあるが、終戦から70年以上が経過して、わざわざ悲惨なことなど知りたくないという「無痛文化」は影響力をいや増している。だが、悲惨さを回避する感情は、「感情政治」とも地続きである点も指摘せねばなるまい。

では、「断絶」はどのように接続されうるのだろうか。ひとつのヒントを与えてくれるのが、アニメ映画『この世界の片隅に』（片渕須直監督、2016年）だ。2018年の夏の時点でも異例のロングランを続けている。笑いもあり、涙もあり、怒りもあった、ある家族の日常生活を描いている本作は、戦争と空襲について考えるきっかけとなる映画だ。

空襲などの戦争作品は、体験者が描く場合に「戦時の異常さ」と「平和な日常」との差異を埋めようと意図し、戦争の恐ろしさや悲惨さが強調される傾向にあった。先述の『はだしのゲン』にも象徴されるように、戦後生まれの少年少女たちにも「トラウマ」を刻印する効果があった。これは、戦争体験世代が多くを占めていた戦後日本社会では受け入れられやすかったといえよう。

だが、時代は変わりつつある。『この世界の片隅に』は、地方・家族の描写が多く、主人公の若い女性「すず」は、戦争を自分の目で捉えて自分の体で体験していくことで物語が駆動していく。

右手を失うという身体の欠如もまた、すず個人の心情描写として展開されるのだ。

「反戦・嫌戦」の訴えを忌避する声がある現状で、『この世界の片隅に』はこれを回避しつつ、「日常生活」を通じて現在の若者と接続することに、かなり成功している。

### ■議論の素材としての『この世界の片隅に』

確かに『この世界の片隅に』は大きな評価を得た作品だが、当然ながら戦争を扱ったフィクションのひとつにすぎない。また、筆者は三度、同作を劇場に観賞しにいったが中高年以上の世代が多かった印象がある。だからこそ、聖典化するのではなく、分析の対象として生徒・学生に提示することも可能だろう。

たとえば、「メディアの特質×戦争の語り」などのテーマで生徒・学生に議論させるには、以下の箇所が参考になるかもしれない。物語の終盤に「玉音放送」を聞いた直後にすずが発した言葉だが、マンガ原作からアニメ版では変更されている箇所である。

#### 【漫画原作】

ああ、暴力で従えとったという事か。じゃけえ暴力に屈するという事かね。それがこの国の正体かね。うちも知らんまま死にたかったな……。

#### 【アニメ映画版】

ああ、海の向こうから来たお米、大豆、そんなもんでできとるんじゃないか、うちは。じゃけえ暴力にも屈せんとならんのかね。ああ、何も考えん、ボーっとしたうちのままだ死にたかったなあ。

この比較考察には、確たる正解はない。しかし映画の鑑賞後に学生・生徒に議論してもらう「材料」として活かせる。たとえば、メディアごとの比較検討や時代性・政治性などの議論が可能だろう。

ここでも、先に触れた「断絶」としての死やトラウマについて、表象にこれを埋める役割が与えられている。だが、視覚メディアのフィクション表現は「より分かりやすいもの」に傾く場合が多い。あるいは「より受け入れられやすいもの」と言った方が正確だろうか。そこで、『この世界の片隅に』といったフィクションのどの部分に「単純化」があるのかを議論しあえば、空襲作品を通じたメディアリテラシーの育成につながるだろう。

なお、先述の文脈化という観点から、先ほどのセリフの引用（マンガ）は「暴力で従えた→だから暴力に屈する」という歴史的な文脈がある。後者（アニメ映画）もまた、作中に戦時下の闇市の描写があり海外輸入品を買うシーンがあったことから、「海の向こうから来たものでできている（＝暴力で従えていた）→だから暴力にも屈する」ということになる。アニメ映画版は、まず自身から発せられる感情表現にワンクッション置かれている。このような歴史的な前後関係も思考材料となるかもしれない。

### ■「空襲を考えること」の可能性

空襲を知ること、考えることに様々な困難があることは既述のとおりである。しかし、空襲を考えることは私たちに思考の可能性を開いてくれる。もちろん、これには「歴史総合」と関わる「相互性」も含まれる。

空襲を記憶し、想起する機会としての追悼日は「8月」ととどまらない。たとえば、東京大空襲は3月、横浜なら大空襲は5月、そして沖縄なら10月となる。さらに、いわゆる「大空襲」以外にも数多くの爆撃がなされている。

このように空襲は確たる点を定めにくい性質もっている。しかし同時に、日本では8月に集中してしまう追悼や想起を別に持ちうる機会でもある。

さらに空襲自体の拡散性は、その攻撃の特質にも現れている。つまり、焼夷弾による攻撃は「爆心」を持ちえず、中心点ははっきりしない。よって、各都市では「記憶の爆心」と呼べる地点が生

みだされる。筆者が日独を歩いて確認したかぎりでは、日本では病院、樹木、百貨店、ドイツでは教会が記憶の中心点となっているケースが多い。

さらに「爆心」との関わりで書けば、空襲はとくに集束型爆弾（焼夷弾）が本格的に使用されたときに、まさにその次元を変えたのである。現行の高校歴史教科書では「ドレスデン空襲」に言及しているものがあるが、第二次世界大戦中の空襲史において大きな意味を持つのは、1943年7月のハンブルク空襲だった。ハンブルクでは、火災嵐（ファイヤストーム）が起こり、3万人以上が犠牲になっている。つまり、思想家のスローターダイクが述べるように、「空間に生存するものすべてを抹殺する」攻撃となったのだ。また、火災嵐が生じている「死の空間」を、誰が語りうるのだろうかという、本稿ははじめの問いともつながる。

### ■慰霊・追悼を拡大する

空襲の性質の一つである加害と被害の距離拡大は、先に述べたように色々な問題を孕むが、この断絶が逆に対話の機会へとつながる場合もある。もちろんパイロットの墜落死という前提はあるが、たとえばB29パイロットやその遺族が参加する空襲慰霊行事や和解作業は、日本では静岡市や宮城県の不忘山で、ドイツではドレスデンで行われている。

ここでもうひとつ問いたい。空襲・戦災は「現場」でしか思い起こせないのだろうか。たとえば、広島や長崎の原爆慰霊祭はベルリンをはじめとしてドイツの各都市で開催されている。とくにハノーファー市は広島市の姉妹都市であり、同市には原爆慰霊碑があり慰霊祭も開催されている。だが、ハノーファーが90回ほどの空爆に晒された戦災都市だということを、どれほどの広島市民、そして私たちは知っているのだろうか。原爆と「通常」爆撃とは爆発の原理が異なるのは当然だが、他都市の戦災について思い起こしてもよいのではないだろうか。これは、先に述べた「通常（conventional）」に関連させれば、現在も続く空爆の容認と地続きではないだろうか。もちろん原



子爆弾が、戦後世界において一国にとどまらない意味を持ってきたことは前提とするとしても。

ほかにも、大阪市とハンブルク市は港湾都市ということで姉妹友好都市関係を結んでいるが、先述のとおりハンブルクは空襲の転換点と呼ぶべき被害を受けた。大阪も1945年3月に大規模な爆撃を受けている。戦災都市としてつながる可能は皆無なのだろうか。

## ■慰霊祭の変容：ドイツ・プフォルツハイムを例に

筆者はここ数年間、2月に実施されるプフォルツハイム市の空襲犠牲者の慰霊祭を調査してきた。1945年2月23日に、同市は大規模な空爆を受け、都市中心部の98%が破壊され、人口のおよそ5分の1が犠牲となった。

ナチ体制下におけるユダヤ・外国人差別によって、空襲当時は都市が「ゲルマン化」されていたので、犠牲者の大半はいわゆる「ゲルマン系」である。しかし、現在のプフォルツハイムは、人口の約4割が移民出自の人びとという都市となった。

市庁舎広場で開催されるプフォルツハイム市の空襲の周年追悼式には、在プフォルツハイムのユダヤ系、アラブ系、アフリカ系などの市民の代表の挨拶がある。市長もナチ体制の迫害が自らの空襲被害を招いたという歴史的文脈を押さえつつ、現在も実行されている空爆や難民排斥について批判し、寛容さの必要性を訴えた。

ここには、空襲の歴史を知り、それを「社会参加」へとつなげていく契機がある。民間人に対する加害行為であり、現在もなお繰り返される空襲の歴史について知ることは、戦時下の社会が生みだす暴力について考えるテーマとして適している。そして、自分たちが暮らす現代社会の問題性、いわば「負の伝統」とも呼ぶべき不寛容・無関心などにも気づかせてくれるテーマなのである。

## ■参考文献

- 荒井信一『空爆の歴史 終わらない大量虐殺』岩波書店、2008年。
- 長志珠絵『占領期・占領空間と戦争の記憶』有志舎、2013年。
- こうの史代『この世界の片隅に（上）～（下）』2008-双葉社、2009年。
- 田中利幸『空の戦争史』講談社現代新書、2008年。
- イエルク・フリードリヒ『ドイツを焼いた戦略爆撃』（香月恵里訳）みすず書房、2011年。
- ペーター・スローターダイク『空襲 テロの源泉にて』（仲正昌樹訳）御茶の水書房、2003年。
- 柳原伸洋「企画の趣旨 そしてそれをさらに『越える』ために 特集「空襲の記憶」の境界 時間・空間・学問を越境して」戦争社会学研究会『戦争社会学研究』（第1号、2017年）74-83頁。
- 柳原伸洋「ドレスデン空襲の公的記憶の変遷と拡がり ―コヴェントリーとの関係を中心に」石田勇治・福永美和子編『想起の文化とグローバル市民社会』勉誠出版、2016年、235-252頁。
- ブリーモ・レーヴィ『溺れるものと救われるもの』（竹山博英訳）朝日新聞社、2000年。